

「命」という存在性

京都文教大学人間学研究所所長 秋田 巖

物事の存在様式は人が思っているほど単純なものではない。「様」式とあるように、まことにもって種々様々である。1月に出版したばかりの拙著『さまよえる狂気』（創元社）でも書いたのだが、このことを論ずるにあたり最もわかりやすい例は神や仏の存在仕法であろう。神が存在するのかどうか。あるいは芥川龍之介『蜘蛛の糸』にあるように仏様が極楽の池の蓮の間からこの世や地獄を見ておられるのかどうか。

神や仏が存在するとかどうのと述べること自体が実は厚かましい。もし、いるとすれば、寒気立つぐらいでは済むはずもない、およそ人間の思考力などでは言葉にしようのないような在り方であろうから。感じることはできるのかもしれない。いや、感じることもさえない。ユングはルドルフ・オットーの言葉を借りて「ヌミノーズ」なる言葉を使用した。これは神仏に関する事象を表現するに当たり、偉大なる一步の踏み出しと見ることができ、私の感覚からすれば、それでもまだ言葉にし過ぎの感がある。それゆえ私は「 」あるいは“ ”とわけのわからぬ表記をすることが多いのであるが、そのうちもう少しまともな表現ができるようになるかもしれない。

とにかく、わけのわからないことが実に多い。科学の発達に惑わされてわかったような気分になりやすいことも現代の病の一つであろう。ま

ったく不明の事々^{ことごと}が圧倒的に多いのである。

宇宙には暗黒エネルギーや暗黒物質なるものがあるとのことで、それらを合わせると96%。「暗黒」なる命名が何故なされているかと言え、要するに把握不能だということだ。水素だのヘリウムだのと人間が同定できる部分は4%くらいしかないとのことである。しかし、これとて宇宙物理学発展途上の一成果にすぎない。百年後、千年後得られるであろう知見からすればどうか。見戯に等しい認識となるかもしれない。しかし、千年後得られるであろう知見もまた同様の運命をたどる。科学と名がつけば、何だか確かなもののように思いこみがちだが、「そのさらに千年後」の視点を忘れずにいれば、いかにもろいものか。

物質についての知見でさえ、そうであるならば、神や仏あるいは命が一体いかなるものであるのか。常に一意見が存在し得るにすぎない。

今年も多くの命が失われた。そして多くの命が誕生した。命とは何か。生物学的死が訪れると同時に存在性を失うとする見方ももちろんありうるであろう。しかしおそらく、ことはそれほど単純ではない。死してのち、より輝く命（たとえば、イエス・キリスト）もあろう。それほど知られたものでなくとも、命は「生」命と必ずしも重なるものではない。「命」もまた、新たな認識を待っているものの一つであろう。